

●技術継承の決め手を探る……………	2
●コミュニケーションを考える「政治家の言葉」……………	5
●アンテナ……………	6
●脳行動学講座21 「情報の出し方」……………	7
●活動報告：矢口教育学研究の4年間……………	8

巻頭言 本当の民主主義を育てよう

国民は今、いらいらしている。国会議員たちはなぜ協力し合わないのか。復興対策が一向に進まぬ状況に多くの国民がいら立ちを持って見ている。それぞれの主張を言い張るばかりで歩み寄らない。相手のミスをあげつらうばかりで、それを修正するための対案を出さない。意見が割れれば、緊急な問題であろうと何も決まらない。決まらない理由はいつも相手のせいだ。自分たちの案を取り入れないと非難しておきながら、取り入れると変節だと責め立てる。反対することにこそ意味がある、と言わんばかりである。

しかし、よく考えてみると、われわれ自身にもそうしたところが多々ある。戦後日本は、戦前の体制を反省し民主主義の形成に力を入れてきた。学校では学級会や生徒会の場を使い、民主主義による合意形成の方法を指導してきた。しかしその実態は「民主主義＝多数決」という一義的なもので、主張された異なる意見について決をとり、多数を得たものが全面的に場を仕切るという形で終わる。意見をすり合わせる、少数意見を取り込むという経験をしてきていないという、そのことが今の国会の状況を生み出しているとも言える。協力しないのではなく、協力して課題に立ち向かうという行動体質が育っていないのである。

民主主義は「いかに多くの人の心を寄り添わせるか」というところに、その真髓がある。「小異を捨てて大同につく」、その上で「大同の中にいかに小異を残すか」、ということである。目指すところは同じでも、そこに迫るための考え方・方法論は様々だ。それを闘わせるが、譲れるところは譲り歩み寄り合意を形成していくのが真の民主主義であろう。どうしたら、その方向に向かうことができるのだろうか。

と、ここで思い出したのが、水海道小学校（茨城県）の自治活動を描いた「私たちの学校」という50年前の映画である。当時水海道小学校では10の自治活動の部があり、映画はその中の体育部の、ある年の運動会で学年が希望する種目がかちあってしまったために起こる対立を解決するまでの活動を描いている。同小では、運動会の企画運営一切が体育部に任されており、この対立の解決のための活動も、教師はわずかばかりの助言はするが、ほとんどは児童主体で進められる。体育部員たちは双方の学年のクラスにその主張を聞きに行き、それをもとに協議し、上の学年に対し希望する種目を下の学年に譲って欲しくないかと交渉する。その代わりに、上の学年に対しては新しい魅力的な種目を提案するのである。背景にあるのは、共通の目標のためにそれぞれが譲り合う、より力のあるものがより多く譲り弱いものを守るという基本姿勢である。

この映画に描かれた子どもたちの行動、合意形成のために意見を集約しアイデアを出し合い協議し提案し交渉する姿は、民主主義とはこういうものだ実感する良い手本だ。50年も前にこうした活動があったのだ。今まさにこれを復活させ、これからの日本を築く子どもたちを育てるとともに、大人たちもぜひ学んで行動に移していきたいものだ。

編 集 部

技術継承の決め手を探る

Off JT、OJTのポイントと組み立て方

研究開発部

■めざせ“ベテラン以上”

団塊世代の大量退職による失われるベテランの技術の継承は、多くの企業の課題である。ベテランというのは、単に技術というものを抽出して獲得した人間ではなく、職場（仕事の間）での行動全体を処理する能力を持った人間のことである。仕事の間というのは、様々な次元の異なった能力を複合的に使用する場であり、その場の状況も一様ではない。そういう仕事の間に対して、スピードのある合理的な行動が、技術という狭い範囲のことだけではなく、仕事の全体に対して発揮される。他の人の仕事についても、他の人との共同のしかたについても、すぐれた測定力を働かせ適切な表現力を発揮する。

ベテランの行動にはむだがなく、必然性がある。多くの場合、複合的な行動が一瞬のうちに行われる。内面行動として外界を測定する行動、それをもとにして動作として表現する行動の間にむだがないということである。そのありさまを、カンとコツというような言葉で表現する。カンとは外界の測定力、コツとは動作として表現する能力を意味していると考えたらよいだろう。

ベテランの、その複合的で合理的でスピードのある行動能力は、長年の経験の積み重ねによって獲得されたものである。その行動能力を、ベテランがその技術を獲得した時間よりも短い時間で、また、新しい技術への対応能力も加えて育てなければならないというのが、多くの企業の課題であろう。いかにして、短期間で“ベテラン以上”を育てるか。Off JT（Off the Job Training）とOJT（On the Job Training）の組み立て方で、それが夢ではなくなる。

■人は、行動したことを行動したように学ぶ

人間の行動は、脳の働きによって生み出されるが、「行動したことを行動したように学ぶ」というのが、人間の脳の学習のしかたの原則*である。多くの仕事に必要な複合的な行動能力を育てるには、複合的な行動をする場で行動するという経験をさせることが必要だということである。具体的な行動対象に対して、その状態・状況をとらえ、それに応じた行動表現が必要な仕事であれば、具体的な行動対象に対して、その状態・状況をとらえ、それに応じた行動表現をするという経験をさせることが必要なのである。

*脳は、行動をしたときに起こる神経回路の興奮（電氣的刺激）の状態が、行動が終わった後にも残る。これが行動の記憶であり、行動したことを記憶するという所以である。

つまり、行動力を育てるとは、行動する場を設けて行動させることである。どういう場を作って、どういう経験をさせるかで、行動力の内容と質とが決まってくるのである。仕事をするという場における行動とは、仕事そのものである。その仕事をどのように積み重ねるかで、その人の行動力の内容と質、つまり仕事の能力が決まってくる。OJTが人材育成の決め手だということである。

■仕事が人間を形成する

行動したとき脳は、行動する姿勢も同時に学ぶことになる。学校教育では多くの場合、教師の側に主体性がある。学習者は受け身の立場におかれ、教師の指示で行動をする。自ら考え、行動し、分析し修正するといった場面が非常に少ない。人間が行動をしたとき、脳は行動の内容ばかりでなく、その行動のしかた行動姿勢をも学ぶのである。「指示待ち人間」と称される受け身の行動体質は、受け身の学習を積み重ねた結果なのである。

企業における仕事の場は、仕事（行動）をするものが、その対象に責任をもって向かう場である。仕事の場における教育は、人間形成に大きな可能性を持つとすることができる。しかし、それは無条件ではない。マニュアル通りの表面的な動作をくりかえす経験をさせるか、行動の場の条件・読取判断し自分の頭を使って必要な行動を生み出す経験させるかで、まったく異なる結果を生み出す。作業者の行動力（能力）をどう育てるかは、どのような行動経験を積み重ねさせるかにかかっているのである。

■Off JT とOJT

とは言え、仕事の場で働くには総合的な能力が要求される。初心者がいきなりそういう場に入って、一人前の作業者のまねをしようと思っても不可能である。その準備の場がOff JT である。Off、つまり仕事から離れた場で、仕事のしかたおよび仕事に対する姿勢を身につける場ということである。その意味で、仕事のしかたおよび仕事に対する姿勢を身につける場としての、Off JT をどう設計するかは重要な意味を持つ。

ところがこのOff JT は、一般に学校の教室で行われている講義方式がイメージされており、必ずしも仕事を構成する要素から組み立てられてはいない。Off JT＝基礎＝普遍的・原理的考え方→講義という構図が成り立っているのである。実習という形がないではないが、それは講義された内容の確認にすぎない。そのためOff JT で学習したことを総合しても、仕事のイメージが全くできていないという例が少なからずある。

Off JTの次の段階であるOJTは、仕事の流れの中に早く入れるようにする目的で、先輩について仕事を習うというようにして進められることが多い。ここで、ただ指示に従い現場の仕事の表面的な動作をなぞるだけの経験をするのか、その行動を生み出すための頭の使い方を経験できるかで、その作業者の能力はまったく異なるものとなる。

このOff JT とOJTを、新しい視点で組み立てようというのが我々の提案である。ベテランの能力を「行動力」としてとらえ、その行動力を育てるための経験の積み重ねの場として組み立てようという提案である。

■ベテランの行動能力

ベテランの行動能力は、長い間の仕事の中で偶然の経験の積み重ねによって獲得したものが多く、そのカンとコツの中身は、ベテラン自身自覚していないことが少なくないが、分析してみると、下記の様な類型に整理できる。

行動能力の類型	行動能力の成立に必要な行動経験
1. 目の前に起きている現象や、経験したことなどを自分で整理する力。また、それを土台にして、必要な行動表現に結びつける能力。	具体的な対象に向かって、そこで起きている現象や経験を普遍的な原理で整理し、仮説を立てて行動しその結果をみる。失敗であればその原因を調べ修正する。その積み重ねでできるようになる。
2. 具体の場に臨んで、外界（行動対象の状況・状態）を測定判断し、すばやく行動表現に結びつける能力。	外界（行動対象の状況・状態）を測定判断し、行動表現する経験の積み重ねでできるようになる
3. 複合的な行動能力 仕事全体に対して、要素とその複合関係を整理して実施管理する能力。	①仕事の全貌と、それを構成する要素的行動、その関係を整理する。 ②複数の要素行動の並行処理をする。 ①②の積み重ねでできるようになる。
4. 他の人と共同する能力 仕事全体における自分と他の人の仕事関係を把握し、互いの状態・状況に合わせて仕事のしかたを設計する能力。	①自分の仕事と他の人の仕事の関係を整理する。 ②他の人の状況・状態を観察し読み取る。その結果をもとにして仕事のしかたを設計実施、修正する。 ①②の積み重ねでできるようになる。

これを成立させるための経験の場を意図的に作り出して行動させるのである。その行動の場が、Off JTの場でありOJTの場である。Off JTとOJTは、次のように構成する。

Off J T : ベテランと同じ行動力を獲得するプロセスを経験する場
OJT : Off J T で獲得した行動力を総合させる場

■Off J T において、最も力を注ぐべきこと

我々が提案するのは、他のものが整理した知識を与えるということではなく、自分で整理をする力をつけるということである。具体的なものを使って、普遍的・原理的思考方を身につけるようにすることである。具体的な場に臨んで、自らその仕組みを解析し納得するという経験を重ねることによって、いつも具体を普遍的原理で整理する力を身につけることができる。さまざまな具体の現象が、普遍的な原理で整理することができるようになることにより、具体の場に臨んで行動できる。そのことによって、行動することへの自信と意欲がわくのである。

つまり、Off J T の場を、仕事のシミュレーションの場とするということである。現場ではないが、現場よりもわかりやすい場、その仕組みを自分で解析できる場、自分で行動のしかたを組み立ててやってみる、失敗を分析しそれを修正することのできる場とするということである。

どのような内容について、どのような場をつくるかは、仕事の内容から決まってくる。すべてを一つの場で、また一つのルートでまかなうというのではなく、要素ごとに必要な経験をさせるための場をそれぞれ作り、段階的に積み上げていくということが必要になるだろう。

Off J T の過程で、いかに主体的な探究姿勢を育てるか、それが OJT 成功の道につながる。

■OJT において、最も力を注ぐべきこと

仕事を手順として、また知識として覚えさせないということである。作業員（学習者）が主体となって研究的に学習（仕事のしかたの探究といった方がよいかもしれない）が進められるようにする。仕事における行動を生み出す「頭の働かせ方」を探究させるようにするということである。そのための学習（仕事・作業）の仕方のポイントは、次のようなことである。

ラウンド方式

行動（仕事・作業）の全体のイメージをつかませながら、何段階かに分けて進めるという方式である。全体行動の概略をつかんだ上で、各部分の仕事を順番にやっていく。それぞれがだいたいできるようになったら、もう一度全体行動をとらえるというようにしていくのである。人間は、いつも全体像に向かって行動している。全体が見えると、部分に意味がわかる。部分がわかると、全体がよりはっきり見えるようになる。何ラウンドでできるかは、その仕事の複雑さによってちがう。1 ラウンドで十分なものもあれば、何ラウンドも重ねる必要があるものもある。

学習をガイドする教材

主体的にと言っても、初心者が主体的に仕事をするのは難しい。その力になる学習をガイドするための教材。従来のテキストや、手順書というようなものではなく、探究の課題と、その対象となるものの調べ方、行動のしかたのヒントを示したものである。

トレーナー

これが最後の決め手である。モデル行動を示しそれをなぞらせるということではなく、作業員が研究的に仕事をとらえようとするのを援助する、という新しい視点で指導するトレーナーである。作業員の疑問に対し、その疑問を解決するための行動経験をさせたり、具体の場の観察の視点を助言したりする。作業に精通する者、さらに教育的見地を持っているもの。ふだんから職場の中を絶えず人間を育てるという目で見ていて、個々の作業員の仕事が能力とマッチしているか、どんな学習が必要か、どんなグループで学習を行ったらよいか、そういう視点を持った人、そういう人を見つけることが、OJT 成功の最大の決め手である。

★コミュニケーションを考える 「政治家の言葉」



政治家という仕事には、言葉が重要な働きをする。自分の思想心情、自分が考える国の進むべき方向、そのための政策を国民に語り、国民の心を動かしていくのである。しかし、準備された演説や国会答弁ばかりでなく、日々のコミュニケーション、言葉のやり取りにも、その政治家の思想・心情や行動姿勢があらわれる。例えば、野田新政権の小宮山厚生労働大臣のタバコ値上げ発言への、2人の大臣の反応。

安住財務大臣「取りやすいところから取るということではなく・・・」

「ご高説は承ったが所管は私」

藤村官房長官「聞いてない」

「私はスモーカーなのでコメントすべき立場にない」

新聞各紙、TV各局は「早くも閣内不協和音」と報じた。安住氏の言葉から、「小宮山大臣の意見には賛成ではない」、「省の権益を守る」という姿勢をよみとったからだ。昨今の記者たちは、政策よりも政局に最大の関心がある。新政権にいかに良い仕事をやってもらうかよりも、この新政権がいつ崩壊するかに興味があり、ほころびを鵜の目鷹の目で狙っている。小宮山氏の記者会見は、タバコの値上げだけを語ったわけではないだろうに、その部分だけ切り取って問題にしている。そうした相手の姿勢を読みとり、それに対応することは、重要なポイントだ。

そんな記者たちに対抗する政治家のコミュニケーションは、もっとすぐれて政治的でなければならない。切り取られ利用された自分の言葉を、どう收拾させるかあたふたするなどもってのほかだ。発足したばかりの新政権の閣僚としてやることは、まず、この政権が心を一つにして難局に取り組む姿勢を見せることのはず。意見の違いは閣議で闘わせればよい。今、国民に向かって何を一番アピールすべきか、そこに向かって行動をする、それが政治家としての行動姿勢でなければならない。

藤村官房長官の「聞いていない」という対応。政治家はいつでも突発的に起こる状況の中で行動しなければならない。すべて打合せ済みなどということはないのである。聞いていないことに、いかに対応できるかこそ、政治家の力である。

政治家のコミュニケーションにおいて最も大事なことは、政治家としての姿勢である。その姿勢が言葉を生み出すからである。何が一番優先されるべき問題か、国民が、さらには地球社会が何を求めているか、という視点で自分が行動すべきことを考えるということではないか。荒さがし、政局の火種探しの記者たちが恥ずかしくなるような、行動姿勢を示してほしいものだ。2人には、せめて下記程度のことを言って切り返してほしかった。

安住氏：小宮山さんは単に税だけの問題を言ったのではないと思います。税金の問題はいろいろな方向から考える必要がありますので、これから活発に議論をしていきたいと思います。

皆さん、私にそんな質問をして、私たちに仲間割れさせたいのですか？

藤村氏：小宮山さんは厚生労働大臣ですから健康問題から愛煙家のことを心配して下さっているのだと思いますよ。私もスモーカーですから、そのお気持ちはありがたく受け止めたいと思いますし、内閣一丸となって私たちは、国民の皆さんの健康と生活の安定のために、さまざまな角度から取り組んでまいります。さあ、他にご質問はありませんか？

(研究開発部)



「復興で輝き奪わないで」

不思議なタイトルの記事だった。朝日新聞社の編集委員氏岡真弓さんが7月29日の朝刊に書いたコラムである。震災以来、氏岡さんは被災地の子どもたちをずっと取材している。被災地の学校の状況は厳しいと氏岡さんは書く。足りない教室、パンと牛乳だけの給食、そして家族を亡くした子ども。しかし、話は意外な展開を見せる。被災地の子どもたちに輝きを感じたというのである。学校の空気が穏やかになり、いじめが消えた。午後の授業で寝る子がなくなった。人の役に立つ仕事がしたいという子が増えた。

確かに、TVや新聞の報道からも、つらい経験をし、過酷な状況におかれているにもかかわらず、被災地の子どもたちの前に進もうとする姿勢が感じられる。多くのものを失った今、本当に大切なものがわかった。家族、故郷、友達・仲間、他の人のために行動する喜び……。そして、自分たちに何ができるのか、自分の頭と身体をフル回転させ、仲間と協力し合って、生活を立て直すために、故郷を取り戻すために立ち向かう。子どもたちは、今ほど、自分の存在の意味を感じていることはないのかもしれない。

こうした状況は、阪神大震災のときも見られたという。氏岡さんは、被災地に招かれ震災の体験を語った小川嘉憲さん（当時西宮市中学校教師）の話を紹介する。小川さんによれば、阪神の場合は、復興が進み生活や学校が平常に戻っていくにつれ、その輝きが少しずつ失われていったというのだ。

復興が進むと輝きが失われるというのは皮肉な話だ。平常の生活、平常の学校生活には、子どもたちを輝かせる反対方向のものがあるということだ。子どもたちを輝かせることは何なのか、それを妨げるものは何なのか、大人たちはそれを見極めなければならない。（1）

★二つの映画にみる人間を育てる教育の形

「ちいさな哲学者たち」と「人生ここにあり」

「ちいさな哲学者たち」は、フランスの幼稚園で始まった哲学の時間の2年の歩みを描いたドキュメンタリー映画。教師の誘導のもと、愛・死・友情・リーダーとはなど、大人でも難しいテーマについて、子どもたちが自分の意見を言い、相手の意見を聞いて、議論することを学んでいく。優れた教師が、4歳児からも本質をついた意見を引き出し、その親にまでも影響を与える様子を描いている。

「人生、ここにあり！」は、1978年に世界で初めて精神病院を閉鎖したイタリアでの、元患者達の協同組合の実話をもとにした映画。大量の薬を与えられてもうろうとしながら、切手貼りなど役所からのお情け仕事をやっていた元患者達に、新しくやってきた責任者が投薬を見直し、彼らを組合の労働者として主体的に働ける仕事を作り出していく過程を描く。日本では障害のある人が働ける場はまだまだ少ない。軽度の人でも箱折やネジの袋入れなどの下請け作業で得たわずかな給与と年金・生活保護で暮らしをたてている。国家予算の中で4割以上を占める教育と福祉、本当に人々をいきいきとさせるための改革が望まれる。

と、ここまではNPO法人アントレプレナーシップ開発センター（<http://www.entreplanet.org>）の原田紀久子さんの受け売りだが、インターネットで調べたら、「ちいさな哲学者たち」はYouTubeで予告編が配信されていた。また、イタリアの話については、「自由こそ治療だ」（ジル・シュミット、社会評論社）などいくつか本が出ている。

自分で考える、また、自分の意見を伝え人の意見を聞くという、一人一人が同じでなく答えが一つでない社会における行動姿勢を、こんな小さなときから育てようというフランスの教育者たち。また精神病の患者を働く人として見て、その働き方をつくり出す指導者たち。日本でもその精神と方法論を学び、そうした方向をぜひつくりたいものである。（S）



脳行動学講座 21

情報の出し方

研究開発部 矢口みどり

たくさん情報が出ているからといって、それが必要十分な情報だというわけではない。福島第一原発の事故は、その発生以来、TVと新聞に毎日あふれるほどの情報が出たが、かえって混乱を招いたと言える事態も起きた。官邸の対策本部、原子力安全保安院、東京電力の少しずつ異なる発表。原発事故に対する様々な学者たちの予測。拡大していく退避および避難地域。放射能と放射線の違いもわからないところに、シーベルト、ベクレル、マイクロ、テラなどと耳慣れない語が飛び交う。放射能量が基準を越え野菜が出荷制限される一方で「毎日食べ続けても人体には影響はない」といった学者からの情報も飛び込み混乱には拍車がかかった。風評被害で野菜が売れなくなり、避難地域外の市にも支援が届かなくなった。

それから半年、未だ原発と放射能に関する情報については、信頼でき、そしてわかりやすい情報が示されているとは言い難い。必要な情報をきちんと伝えるというのはどういうことだろうか。その情報を伝えられた人が内容を理解し納得できるようにするためには、どういう視点が必要なのか。

人間の脳は毎日、五感を通じて入ってくる情報を分類整理し記憶していくようになっている。入ってきた情報は過去の情報と関係づけられ、脳の中には膨大な情報のネットワークがつくられている。新しい情報が脳の情報ネットワーク構造の中にきちんと位置づけられるためには、すでにその構造の中にある情報と関係づけられなければならない。つまり、その人がいつも使っている尺度、なじみのある考え方を土台にして情報提供する配慮が必要だということだ。さもなくば、新しい概念を取り込むためのプロセスが踏めるような情報の出し方をする必要がある。

例えば、放射線量の1年の基準値と、線量計で測定する何マイクロシーベルト/時の関係。「/時」というのは1時間当たりの放射線量である。1年は8760時間(24時間×365日)なので、「/時」の値の8760倍が1年に受ける放射線量になる。このように計算してみると、1時間当たり0.11マイクロシーベルト以上になると、安全基準を越えるのだということがわかる。

		1年間 (/時の値×8760)	1時間
自然放射線量 (世界平均)		2.4 ミリシーベルト (=2400 マイクロシーベルト)	0.27 マイクロシーベルト/時
一般国民に対する 安全基準値*	平常時	1 ミリシーベルト (=1000 マイクロシーベルト)	0.11 マイクロシーベルト/時
	緊急時	1~20 ミリシーベルト (=1000~20000 マイクロシーベルト)	0.11~2.28 マイクロシーベルト/時
放射線業務従事者に対する安全基準値		20 ミリシーベルト (=20000 マイクロシーベルト)	2.28 マイクロシーベルト/時

*国際放射線防護委員会の2007年勧告に基づいて決められたもの。

もっとも、これは外部被曝・内部被曝合わせての値であるから、測定値を聞いてこれなら安全という判断ができるまでには至らない。食品を摂取による内部被曝量、自然放射線量など、もう何段階かの学習プロセスが必要だ、正しい情報だからといっても、専門家の使う言葉をそのまま横流しても、一般人にはよく伝わらない。新しい情報を伝える場合は、その人が使っている言葉と概念とを用いて伝える工夫を、また言葉だけではなく、イメージ化できる手立てを工夫するということが必要だ。

その意味で、情報の出し方として大いに参考になったのは、「東京の放射線量はモスクワの半分程度」というロシア政府の放射線医学調査団の調査結果の記者会見(4/15)だった。

活動報告 矢口教育学研究の4年間



能力開発工学センターの創立者矢口新（やぐちはじめ 1913-1990）は、社会の課題に主体的に取り組む実践人の育成を目標にその具体的な方法を開発した教育研究者である。その仕事と思想を後世に伝えたいと「矢口教育学研究会」を始め、早や4年がすぎた。

矢口の研究活動は東京帝国大学卒業（1937年）と同時に始まっているが、矢口とともに活動した関係の方々が存命でお話が伺える戦後初期 1940～50年代に焦点をあてて研究を進めている。茨城県水海道小学校と富山県北加積小学校での実践、続いて1951年から参画した富山県総合教育計画の策定について、聞き取り調査と関連する資料（カリキュラム、指導案、教材など）を収集した。

発見された膨大な資料群と、聞き取り調査の整理分析はまだ続いているが、その過程で、矢口が目指したもののやその研究姿勢が、実像として浮かび上がってきている。水海道小での、2紙で競争する会社組織の学校新聞、学校のハ工退治から地域の環境へと関心を広げる保健部の活動などの児童の自治活動、北加積小での地域や生活の課題に取り組む学習など、子どもに現実を見る目を持たせ、課題を探究する力を育てる指導が行われた。当時の教員への聞き取り調査から明らかになったのは、仲間で一緒に考え行動して学ぶことの重要性を、そして生徒の前にまず教師自らが課題を探究する姿勢を持たなくてはならないことを学んだということであった。カリキュラム作りで行き詰まり矢口に答えを求めたある教師は「…僕も一緒に考えているんだよ」と云われたことを今でも覚えていた。

「社会の課題に主体的に取り組む実践人の育成」という矢口の教育の考え方は常に一貫し、それは現在の教育課題の解決に多くの示唆を与えてくれる。富山県の総合教育計画においては、矢口は県勢の実態と将来構想をふまえ、目標となる人間像を地域の建設者とした。社会に出て様々な場で仕事をする人間を育てるために「教育に産業性を付与する」という方針を掲げ、職業高校の比率を高くし、産業教育館を始めとする学校と産業の現場を結びつける様々な計画を進めた。学校と仕事の接続が大きな教育課題になっている今、その先見性を再評価すべきであろう。

研究メンバーの一人である越川求（こしかわもとむ・立教大学大学院後期博士課程・教育史）は、矢口研究会の調査や討論を土台に、矢口の実践が教員の力量形成に及ぼした影響と、我が国最初と言ってよい総合的・地域教育計画である富山県教育計画の意味に特に注目し、下記のように学会発表をしている。

- ・「戦後教育改革期における教員の力量形成－水海道小教師と国立教育研究所矢口新とのかかわり－」日本教師教育学会 08.9
- ・「矢口新の教師教育論－富山県北加積小の実践から－」日本教師教育学会 09.10
- ・「1950年代から60年代の地域教育計画論の歴史的展開－矢口新の地域教育計画の実践を中心に－」教育史学会 09.10
- ・「富山県総合教育計画と社会教育計画」日本社会教育学会 10.9
- ・「矢口新の教師教育論－国立教育研究所・能力開発工学センターにおける実践を手がかりにして－」日本教師教育学会 11.9
- ・「戦後カリキュラム改革と自治活動－1950年代茨城県水海道小の実践を中心に－」教育史学会 11.10

（ 榊 正昭 ）

《編集後記》 今号には政治に関係する内容を2つとりあげました。政治情勢が原因で日本の国債の格付けが下るなど、現在の日本の最も大きな課題の一つが政治であるのは間違いないところ。「政治=イデオロギー」の問題とされ、制度に関する知識に終る傾向にあった政治学習。これを大いに反省し、積極的に政治学習を進め、この国の行く末を安心して任せられる若者を育てる努力をすべきではないでしょうか。 (M)

財団法人 能力開発工学センター

〒203-0042 東京都東久留米市八幡町 1-1-12
TEL:042-473-1261 / FAX:042-473-1226

<http://www.jadec.or.jp/>

<http://jadec.jp/> (資料館)

E-mail: info@jadec.or.jp